



白いフワフワの軽い粘土。少しずつ手に取り、伸ばす、ちぎる、丸めると感触を楽しみました。一人ずつ黒いボードの上に置いて持ち上げ、横から眺めてみたりしました。粘着力がある粘土なのでボードから落ちることなく四方八方から観察していました。

触ることに躊躇している子どももヘラなどを使い、少しずつ感触を楽しむ姿がみられました。

粘土に触れあった後は廃材をテーブルの中央へ。松ぼっくり、木のマドラー、ペットボトルのふた、ストロー、何か分からないもののふた…と箱の中から好きなものを選んでいました。「どうするの?」と質問をする場面も…「好きなようにしてみてください」と伝え、ひとつずつ観察する子ども、指にはめてみる子ども、そして多く見られたのが粘土にさしてみるという行為。フワフワの素材に固い素材の物、何かさしてみたいかなのですね。

絵の具も出すと色をつける様子も、粘土をはずしてボードに塗って楽しむ子どももいました。絵の具の器の中に粘土を浸してもみこむ作業に集中する子どももいて、足されていく絵の具により一層やわらかくなり感触を楽しんでいました。

時々保育士が粘土や廃材でヒントになるようにと、あそびを目の前で行っていても誰ひとり真似をする子どもがあらわれませんでした。それは子どもたち一人ひとりが自分の思いで楽しんでいただけだと感じました。ふたをながめて観察する、絵の具の混色をし青を追求する、ありの家をつくる、ケーキに見立ててハッピーバースデーをうたう…2時間近くも集中して遊んでいました。それぞれの興味で好きなようにやり尽くした、という満足感があつたように思います。

子どもによってはまっていくこと、興味をもつことは同じではない。大人が使い方。あそび方を決めないという環境をつくることの大切さを改めて感じ一人ひとりのきらきらしたまなざしを感じることができました。

